

カヤック模型

イヌイト

グリーンランド

長さ 30.0cm

北方民族博物館だより
—第28号—

第12回北方民族文化シンポジウム

調査報告

講習会「モカシづくり」／参加報告・北海道民族学会

News

2

6

7

8

第12回北方民族文化シンポジウム

北方における漁撈と文化変容の関係

—サケをめぐる文化—

開催日：平成9年10月15日(水)、16日(木)

今回は北太平洋沿岸に共通する文化要素である「サケ利用」をテーマに、昨年度に引き続き「開発と文化変容」について議論しました。以下に各発表の要旨を紹介します。

基調講演

■岡田淳子（北海道東海大学）

「北太平洋の先住民社会とサケ」

北太平洋地域での文化の定着と発達が海に適應した生活の完成によってもたらされ、確実な食料資源としてサケ類が先住民の生活基盤を支えてきたことは、よく知られている。「サケ・マス文化」の時間的・空間的広がり、北緯40度以北の川の流域で中石器時代から始まり、漁場は産卵場に近い上流から次第に河口に広がったものと思われる。

サケの重要性は、生業労働に従事する時間の約4分の1がサケ漁にあてられていたトリリングットの事例や、各民族誌や出土遺物のデータによってサケが食料の4分の1以上を占めると推測できることから知る事ができる。捕獲法、調理・保存法や精神文化にも共通点が多いが、わずかに異なる点もあり、サケ文化が複数カ所ではまったことがわかる。そして、儀礼や禁忌が資源保護に対して有益に働いていたことも述べておきたい。

しかし、非先住民による商業捕獲の拡大とともに自然条件では資源が先細りになり、孵化事業の開始などによって、先住民の生業は大きな変化を余儀なくされた。また、遠洋漁業が行われるようになり、サケは北太平洋全域、広くは世界の漁業・流通経済のなかでとらえられるようになった。近年、養殖や輸入による供給過剰がサケの価値を低下させている。「サケ・マス文化」は新たな局面を迎える時期に差し掛かっているといえよう。

第1部「サケ漁文化と歴史的変遷」

■ハーバート・マッシュナー（ウィスコンシン大学マディソン校）

「サケ漁と北西海岸の社会の発達」

北太平洋とベーリング海地域では、サケは予測



可能な資源で、捕獲も保存も容易であったため、最も重要な生業・経済資源であった。歴史的にも北太平洋圏の先住民は、貯蔵したサケを食料として厳しい冬を乗り切ってきた。大量の魚を蓄えることは、より複雑な狩猟採集社会を発展させる上で重要なことであり、他の食物が少ないときなどの補完ともなっていた。また、貯蔵サケは、多くの社会で地位や名声を上昇させたり保つための饗宴を開く際の富となっていた。

しかし、近年の考古学的研究では、サケ漁は必ずしも安定した生業活動を保障する最適な選択肢ではないことが示されている。サケが最初に大量利用された事例は北米の8,000～10,500年前の4つの遺跡から見つかっている。その後の数千年間はサケは次第に重要性を増すが、5,000年前までは基本的な資源にはならなかったと見られる。南東アラスカでの最近の調査では、サケへの依存はむしろ新しいことで、1300年頃はタラ、ニシンなどが食物の大部分を占めていたことが論証された。それはまた、サケの遡上数が年によって大きく変化することを示しており、地域によってはサケに依存することが危険な戦略であることをも物語っている。産卵時期の母川の降水量等によって回帰するサケの数は変化することがあるし、サケが少なければ争いによって小さな漁撈集団は漁場を追われてしまうこともある。また、東アリューシャン地域などサケの遡上の少ないところでは、サケ漁は小さな役割しか持たず、こうした場所では集落を内陸から海岸へ移し、海獣猟などに依存していたようである。

これらの研究は、先史時代の変化を知るとともに、将来的な視点での世界で最も重要な漁業のモデル化とも、深い関わりを有している。

■岩崎・グッドマン まさみ（北海学園大学）
「カナダ北西海岸先住民族によるサケ漁の歴史の変遷」

本発表ではカナダの中でも規模も大きく、長い歴史を持つブリティッシュ・コロンビア州（以下B.C.州）のサケ漁の歴史の変遷を検証する。

先住民族による伝統的なサケ漁は、“HOUSE（ハウス）”と呼ばれる地域社会組織を単位として、サケの漁業権や資源の管理システムのもとで行われていた。さらに州内の各地をつなぐ交易活動は、重要な社会的ネットワークになっていた。

しかし、ヨーロッパからの移民が増えるにしたがって先住民族のサケ漁も変化し、1800年代後半に始まったサケの缶詰生産は決定的な影響をもたらした。生産規模の拡大につれて、先住民族の漁場にサケが来なくなる現象が多くなり、加えて連邦政府の施行した「漁業法」により、先住民族のサケの捕獲と流通にも厳しい規制がしかれた。

今世紀にはいると、先住民族のサケ漁と非先住民の商業捕獲との対立が法的に争われるケースが増えた。これは連邦政府の先住民族政策と無縁ではなく、1920年代にあらゆる文化的権利が否定されたことを背景に、先住民族の権利を守るための運動は組織的に大規模なものへと発展していった。

1982年のカナダ憲法制定以降、先住民族の権利を獲得しようという動きはより活発になり、現在B.C.州では40を越えるファースト・ネーションが連邦政府と土地の権利に関する交渉を行っている。サケ資源の状況や地理的条件、過去にカナダ政府と取り交わされた合意書の内容などによって地域差があるが、先住民族のサケ漁の将来は、土地権利交渉の結果に大きく左右されているといえる。

■齋藤玲子・渡部裕（北海道立北方民族博物館）
「アイヌ社会とサケ」

アイヌが居住してきた北海道では、主に3種の

サケ類が春から初冬まで捕獲可能な安定した資源であった。江戸期に商業捕獲が拡大される以前は、潜在的に1人あたり100尾をこえるサケを利用することが可能であったと推測され、その数は、シカをはじめとする獣肉や植物性食料を考えると、長い冬を越すのに十分な量であった。アイヌにとってサケは自家食料であるとともに、交易品としても高い価値を持ち、サケに関わる精神文化からもその重要性を読みとることができる。

江戸期の商場知行制および場所請負制下では、アイヌは海産物生産の労働力として、時間的・空間的制約のもとにおかれ、低廉な報酬での労働を余儀なくされていたが、地域によっては漁業権が認められていた事例も見られた。また、この頃の本州への塩サケ産出量は約200万尾と試算されるが、資源的には再生産が可能な範囲であったといえる。

明治になるとサケ類の漁業の主体が沿岸定置網に移行し、資源保護の観点から川での捕獲が禁止された。商業捕獲の拡大による資源の減少は長く続き、アイヌの伝統的なサケ漁文化は、明治中期以降大きな打撃を受けたと言える。

第2部「サケをめぐる精神文化」

■菅 豊（北海道大学）

「サケをめぐる精神文化の日本的様相」

本発表では魚叩^{なたき}棒や神話、初サケ儀礼などをおして、アイヌ、北西海岸ネイティブと日本本州を比較し、サケをめぐる二分法的世界観と死と再生の論理の検討をしたい。

アイヌでは、サケはカムイ（神）の支配のもとにあり、その遡上はカムイが制御するとされている。魚叩き行為は、サケの靈魂をカムイの世界へと送り返す儀礼と考えられ、規定通りにすればサケが再び生き返って人間の世界へ訪問することができるという神話も存在する。これは初サケ儀礼の論理と軌を一にするものである。北西海岸ネイティブにおいては、サケは人間の世界と対置される「サケの国」に住んでおり、そこでは人間の姿をとると考えられている。「サケの人びと」は魚叩棒で殴り殺されるとサケと化し、人間の食料と

なる。この死は終末的なものではなく、その骨などを水中すなわち「サケの国」に戻すと再生するとされており、この観念に裏打ちされた儀礼・タブーが高度に精緻化・様式化され、口承文芸も多く伝えられている。日本の本州においても、魚叩棒にエビス神と付会する伝承が付随していることや、初サケ儀礼で肉体の一部を川に流すこと、さらにサケの「王」とか「主」などといわれるサケが毎年決まった日に川にやってくるという昔話「サケのオースケ譚」などの事例がある。これらからは、明瞭ではないがサケの永遠不滅の靈魂の存在や再生の観念、二分法的な世界観を読みとることができる。これらの共通性は文化の伝播というより、サケという動物の規定力から生まれた基層信仰的な世界観と理解している。

最後に日本における独自の事象として、未体系であったサケに関する民俗・伝承の伝播と再構成に修験道などの民間宗教者が大きな役割を果たしたことを挙げておきたい。日本はさまざまな文化が流入し、独自のシンクレティズム（諸教混淆）を繰り返して特有の文化状況を形成した。サケをめぐる精神文化を考えるうえでも、北方へ連なる基層的文化とそれに習合する南方文化の関わりを考えることは重要な課題である。

■渥美一弥（一橋大学大学院）

「「文化」を過去形で語ること —カナダ・サーニッチ族のサケ漁、リーフネットに関する「語り」について—」

本報告が注意を向けているのは、現地の人びとがどの時制を使って自らの文化を語るかということである。バンクーバー島のサーニッチの言説を時制で分類すると、過去形は歴史的「事実」の伝承、現在形はイデオロギーの「主張」という意識が強い。ここでは、サーニッチのサケに関する言説を紹介するとともに、伝統的漁法であるリーフネットに関する「語り」に過去形を使う背景について考察してみたい。

サーニッチの学校ではサーニッチ語の教師によって神話やリーフネットについて教えられている。

リーフネットは2艘のカヌーの間から海底に降ろす一種の引き網で、潮流によって回遊するサケの通り道に設置されるので、潮流とサケの通る道についての知識が必要である。解説書では、この漁法がどのように伝わったかという神話や長老たちの述懐がすべて過去形で語られている。そこからは、長老の話は過去の事実に基づいたものであることが理解される。また、神話が長い間伝えられてきたことを「物語る」とともに、聞く者と語る者に「時間」とイメージを共有させる働きがある。そして、現在のサーニッチの人びとは自分たちを「リーフネット漁をする人びとである」と（現在時制／主張の時制で）定義し、他の先住民集団との差異を明確にしている。

しかし、リーフネット漁は1916年以降カナダ政府によって禁止されている。リーフネットに関する「説明」に過去形を使うことは、「現在」を語ると同時に、リーフネット漁を行っていた「過去」を強力な「思い」に変えることでもある。そしてそれは、サーニッチの人びとにとって神話が架空の物語ではなく、実態としての過去なのだと主張する力を与えるのである。

第3部「先住民のサケ漁文化と現代」

■グロリア・ウェブスター（ウミスタ・カルチャーセンター創設館長）「アラート・ベイにおけるサケの人びと」

私たちクワクワカクウ（外部の言語ではクワキユートルと呼ばれた）の住むアラート・ベイはバンクーバー島の北部と本土の間にあるコモラント島に位置する。クワクワカクウは長い歴史のなかで、サケと共に生きてきた人びとである。サケを大切に扱うべきものであることは、私たちに伝えられてきた多くの説話が示している。また、サケの重要性はさまざまな地名や月（季節）の名称となっていることにも反映されている。「サケの人びと」としてポトラッチは社会組織のまさに中核であり、春から秋までに収穫される豊かな資源のおかげで、荒天の冬には祭りに専念できたのだ。この地域は、ヨーロッパ人がやって来る

まで「サケの人びと」の世界であったが、やがてハドソン湾会社が進出し、キリスト教の教会や学校が建設され、ヨーロッパ系漁業者が増えた。

サケの捕れる河口に住んでいた私たちの祖先は現在のアラート・ベイに移住させられたが、ここではさまざまな圧力のなかでもサケに依存した生活を送ってきた。ところが、近年新たな漁獲規制や養殖漁業の公害、アメリカによる捕獲、漁業海洋省の誤った資源管理などにより、資源は減少し、失業などの社会問題を引き起こしている。私たち「サケの人びと」は、川のことや、サケの生態についてよく知っているのに資源管理に対して発言の機会はなく、無視されているのだ。

■野本正博（財団法人アイヌ民族博物館）

「現代に生きるアイヌのサケ利用文化」

アイヌの伝統的な生業であるサケ漁が禁止されてから約120年が経ったが、その間もサケに関わる儀礼や伝統的な食生活が失われたわけではなく、サケの料理方法も数多く伝えられている。子どもの頃、祖父がその年はじめてもらったサケを何気なくストーブの火にくべた行為を不思議で特別な思いとして記憶している。それが初漁のサケを迎える儀礼であることを、博物館に勤務するようになって初めて知った。さらにアイヌ文化の象徴として位置づけられているイオマンテ（熊の霊送り儀礼）においても、賓客として迎えられた熊神にサケ汁を供え、神の国へのおみやげの一つとして乾燥したサケを用いることはサケの重要性を示している。サケという生活を維持する糧が十分にあって、はじめてイオマンテを執り行うことができるのである。

1982年に札幌の豊平川で「復活」された「アシリ チェップ ノミ」（新しい鮭を迎える儀式）以後、同様の儀礼の復活は全道に広がり、各地のウタリ協会支部がアイヌ文化伝承事業の一貫として行っている。これらの儀式を行う背景には、アイヌ文化を継承し、その理解を促進しようとするアイヌの意思がある。白老・登別・千歳などで行われているサケにまつわる儀礼は、地域によって



意味やその発展のしかたに差があるが、新しい祭りの創造が行われていることは注目すべきことである。「伝統的な儀礼」色が薄い祭りになっているものもあるが、文化の公開に重きを置くなど、それぞれのやり方には主体的選択がなされている。

アイヌのサケ利用に関する物質文化と精神文化の両面をうまく活用し、現在の環境のなかで適応していく手段とすることが、現代に生きたかたちの文化となるだろう。

* * *

第1部では、コメンテーターの秋道智彌氏（国立民族学博物館）から、サケ資源の安定性と変動性について統計的な報告があり、議論の中心を「資源をグローバルにとらえるか河川ごとにとらえるのか」、「缶詰産業」、「先住民の漁業権」に絞ることなどの提案をいただきました。また、近世の北海道の漁業については、小林真人氏（北海道開拓記念館）から、近年の歴史学的研究では、地域によってアイヌの入会権はかなり認められていたことや「自分稼」についての報告とコメントがありました。第2部では大林太良氏（東京大学名誉教授・当館前館長）から、沿海州・中国における他魚種を含む初漁儀礼や他の動物との関係についての事例報告と、北欧までの広い地域での比較研究を求めるコメント等がありました。

討論では、サケは安定した資源と言えるのかどうかについて、特に多くの意見がありました。また、会場からも質問・意見が活発に出され、身近な問題としてのサケ利用文化と、先住民の権利や環境問題への関心の高さをうかがわせるシンポジウムとなりました。

（学芸課 齋藤玲子）

能取岬周辺の遺跡分布調査概報

(平成9年9～11月)

当館では調査研究活動のひとつとして先史時代の遺跡の調査を行っています。平成7年度からは「能取岬周辺におけるオホーツク文化と擦文文化の関係の解明」をテーマに、擦文文化期の遺跡である美岬4遺跡の住居址と、オホーツク文化期の遺跡である能取岬西岸遺跡の発掘調査を行ってきました。

今年度はこれまでの調査の成果を活かし、どのようなところに集落が形成されたのかという遺跡の立地に注目して、あらためて能取岬周辺の遺跡分布調査を行いました。

網走の街の北に位置し、東側はオホーツク海、西側は能取湖に面する能取岬では、これまでに縄文時代から続縄文時代、オホーツク・擦文文化期、アイヌ文化期までの遺跡が確認されています。これらの遺跡の多くはオホーツク海に面する側に立地していますが、この一帯は標高40～50mの海岸段丘が切り立った崖になっています。遺跡はこうした段丘を流れて海に注ぐ小川によって形成されている沢沿いに多く、時代が下るにつれて海に近い方に立地する傾向がみられます。

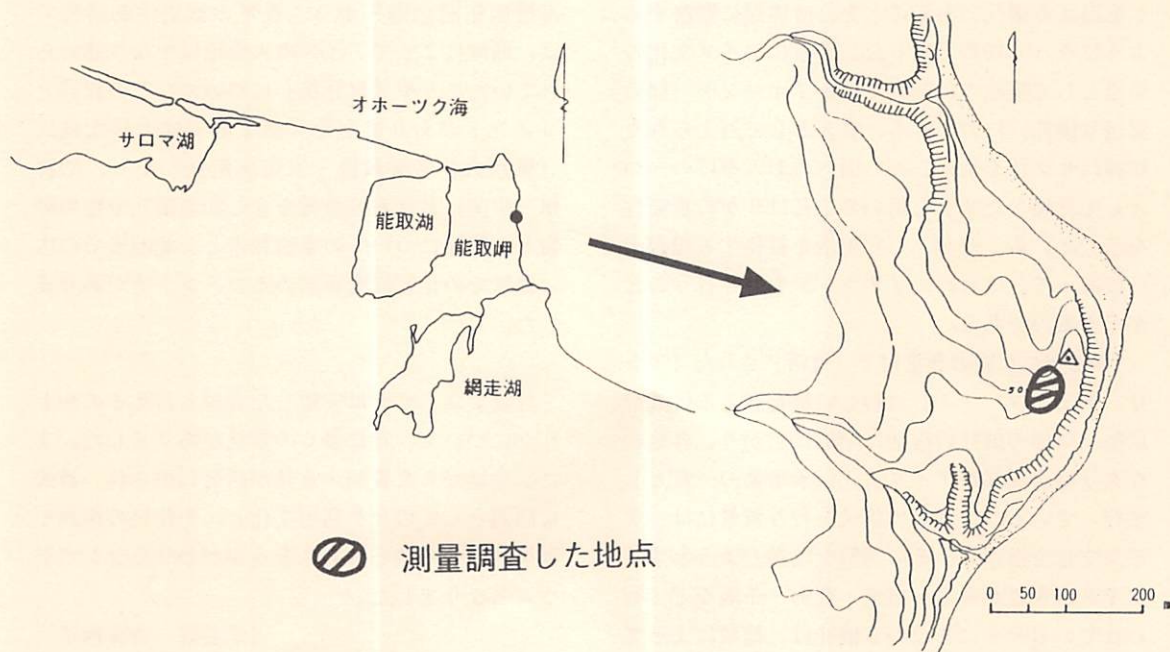
今回の調査で対象としたのはオホーツク・擦文文化期の遺跡であったため、主に海岸近くと小川

の流れる沢沿いを中心に踏査したところ、遺跡台帳には未登録の遺跡が新たに数カ所見つかりました。11月初め、それらのうち10軒の住居址が確認された集落跡1地点の測量調査を行いました。

この集落跡は海に面した崖から約30mほど山側に入ったあたりに位置し、近くには沢があり、尾根上のやや高くなっている部分にあります。竪穴住居址の形はほとんどのものが方形で擦文期のものと考えられます。竪穴の掘りこみの深さはおよそ1m弱で、生い茂った背の高い笹に覆われていましたがそれでもはっきりと住居址だとわかるものでした。今回は測量図をのせることができませんでしたが、集落の中心付近には周囲のほかの住居址とは違って長方形をした、ひとまわり大きなものが一軒あり、興味深いものでした。

擦文文化の人びとは、一般に川でのサケ漁を行っていたと考えられています。しかし、このように海に面した崖の上といったサケなどが遡上してこられないような場所に住んだ人びとは、それ以外のもっと多くの海洋資源を利用した生業で暮らしたてていたのではないかと考えています。

(学芸課 稲垣はるな)



測量調査した地点

モカシンづくり

講師：笹倉いる美（当館）

11月30日にはモカシン作りの講習会を開催しました。

モカシンとは一枚の皮で足をくるむタイプの北米インディアンの靴のことをいいます。皮の裁ち方の違いで形もさまざまになり、色とりどりの刺繻しゅうやビーズ、ヤマアラシのとげなどで装飾が施された大変美しいものもあります。

今回お手本にした資料は、甲にあたる部分とフリンジ（切り込みの入ったふさ飾り）を、ベースとなる皮に後から縫い合わせて作る形式のものです。実際の資料はムース（ヘラジカ）の皮を使ったものですが、講習会では豚皮を使用し、できあがりのサイズが15cmほどの子ども用のものをつくりました。

はじめにつまさきになる部分にひだをとり、飾り皮を挟み込んでベースの皮と甲になる皮を縫い合わせていきます。このとき中心をとることに注意をはらっていないと、ねじれた靴になってしまいます。次にかかとを縫いとじると、これで靴の形になります。フリンジをつけ、最後に皮ひもを通すとできあがりです。

靴を作るのは初めての人ばかりで、慣れない針仕事に苦勞もされていましたが、予定の時間内にほとんどの参加者が一足分を仕上げることができ、満足されていたようです。



北海道民族学会

平成9年度第2回研究会

開催日：平成9年12月13日（土）

会場：小樽商科大学

北海道民族学会の研究会に出席しました。今回の研究発表はすべて北方諸民族や文化を対象としたものでしたので、その要旨を報告します。

* * *

■中村和之氏（北海道札幌稲西高等学校）

「李志恒『漂舟録』をめぐって：三百年前の蝦夷地の状況とアイヌ文化」

『漂舟録』は17世紀末の朝鮮の官僚李志恒の漂流記である。礼文島でのアイヌの風俗についての記述が見られるなど、本書は当時のアイヌの生活様式を知る上で貴重な史料となっている。また、その内容や対応する日本側の史料などから、実際には密貿易を目的とした来航だったことが示唆された。これは当時の大陸と本州、北海道の活発な交流の一端を示すものと考えられる。

■栢谷隆男氏（北海道札幌篠路高等学校）

「膜鳴鹿笛の形態分類：アイヌとマタギの関係を探る」

鹿笛とは、鳴き声に似た音でシカをおびき寄せ狩猟するための道具であるが、アイヌとマタギには特徴的に凸型の鹿笛（膜鳴鹿笛）が見られる。発表者は約100例を比較検討し、アイヌのものとはマタギのものでは形態や材質に違いがあることを示した。また、アイヌのものに関しては明治以前の記録がほとんどないことなどから、これがマタギの影響を受けたものだったことが示唆された。

■谷本一之氏（北海道立アイヌ民族文化研究センター）「チュクチ・コリヤクの伝統音楽」

北方民族の芸能については、イヌイトの研究から、生業形態と芸能とが相関することが示唆されている。すなわち単独で狩猟をする地域では互いに協調しづらいリズムで、クジラなどを集団狩猟する地域では協調しやすいリズムで演奏するという。発表者は現地調査の結果から上記の仮説を支持し、カムチャツカ半島の伝統的な音楽は協調しづらいリズムであるが、これは各自が自分の家系のメロディーを持つためであることを示した。

（学芸課 中田 篤）

■寄贈資料紹介

- 週間朝日：網走市の寺田弘氏から「週刊朝日」（昭和12年1月31日号）1点が寄贈されました。
- 石錘：網走市の鍵野目武雄氏から石錘1点が寄贈されました。
- アザラシ皮製靴：遠軽町の鈴木安太郎氏からアザラシ皮製靴4点が寄贈されました。
- 手袋：日野市のスチュアートヘンリ氏からイヌイットのトナカイ毛皮製手袋1点が寄贈されました。
- バッグほか：札幌市の池上二良氏からウイルトアのトナカイ皮製バッグ1点、手袋1点、テーブルセンター2点、サハリンの短靴2点が寄贈されました。
- ナイフほか：網走市の北川アイ子氏からウイルトアのナイフ6点、錐1点が寄贈されました。

■執筆・出版社から贈呈を受けた書籍（10～12月）

- ・大林太良 1997 「葬制の起源」中公文庫
- ・Maschner, H. D. G. et al. 1997 *The Archaeology of the Lower Alaska Peninsula*. Univ. of Wisconsin
- ・阪本英一 1997 「群馬の小正月ツクリモノ(上)」みやま文庫 他1冊
- ・Johansen, Ulla 1994 *Beruf und Ethik: Kriterien Sozialer Schichtung bei Kleinstädtern in Estland*. Holos Verlag
- ・大林太良・生田滋 1997 「東アジア民族の興亡 漢民族と異民族の四千年」日本経済新聞社

■主な来館者（10～12月）

- 10/4 アラスカ州パーマ市市長 ヘンリー・グィノーテ氏

- 10/21 北京民族中央大学教授 耿世民氏、ロシア・タイムル自治管区行政局 A. A. バルボーリナ氏、ロシア・ドゥジンカ市行政局 V. N. パルフィーリエフ氏、ロシア科学アカデミー東方学研究所サンクトペテルブルグ支部 E. I. クチャーノフ氏、L. J. トゥグーシェワ氏他1名
- 10/28 ロシア科学アカデミー極東支部 I. S. ジュシホフスカヤ氏、L. E. フェチソバ氏他1名
- 10/30 モンゴル農業大学 R. サンヤトグト氏、N. アルタンスク氏

■その他の行事報告

- 10/25 博物館クラブ「植物で染め物しよう」
- 11/8 博物館クラブ「楽しい火おこし」
- 12/13 博物館クラブ「北方の文様でつくる年賀状」
- 12/27 ロビーコンサート'97「ピアノ三重奏による青少年のための室内楽の夕べ」

みんぞく
こうこ in HOKKAIDO
はくぶつかん (10～12月)

※このコーナーでは、当館の活動に関連する分野の新聞記事のうち、道外ではあまり紹介されていない情報を掲載します。

- 10/25 アイヌ文化賞澤井さんと葛野さん、奨励賞杉村さんと上武さんに初の受賞者決まる/T
- 10/30 小清水の「アオシマナイ遺跡」で「シカ送り」とみられるシカの角や頭骨を確認/D
- 11/26 アイヌ文化振興・研究推進機構、助成事業37件（総額約3,700万円）を決定/D

- 12/9 苫小牧駒沢大、地元の特徴をいかし来春「環太平洋・アイヌ文化研究所」を学内に開設/A S
- 12/19 個人所有屈指のアイヌ資料、妻沼浩史さん（北見市大町）のコレクションが小樽運河倉庫に移設へ/Y
- 12/23 アイヌ民族の農耕跡？ 虻田町・高砂遺跡の畝の跡からアワ、ヒエの花粉を発見/M
- 12/31 少数民族に対する理解を深める「サハリン・マイノリティー・フォーラム'98」、サハリンで来秋開催/Y

*A S：朝日新聞、D：北海道新聞
M：毎日新聞、T：北海タイムス
Y：読売新聞
複数紙掲載の場合は、抜きの大きい方を紹介しています。

☆観覧者動向（10～12月）

	(名)
	常設展示
10月	2, 831
11月	1, 339
12月	766
計	4, 936

§編集後記§

地元の方から、当館のテーマは一般にはなかなか関心をもちにくいと言われてきました。入館者数にもそれは反映されているようです。ところが昨年末のロビーコンサートの参加者は約230人。もよおしによってはこれだけの人が集まるのだなと感心する一方で、当館のテーマも多くの人の関心と結びつけるような努力をしなければと感じました。（中田）